

東京都立富士高校・附属中学校

進学実績向上

「富士山型の人間形成」を 図る指導で、5教科の 総合的な学力向上を実現

変革のステップ

背景と課題

- 高校低学年次から中堅私立大学への進学を目標とし、力を入れる教科・科目を絞るなど、進路意識に課題がある生徒が少なくなかった

実践内容

- **裾野の広い学力の形成** 「富士山型の人間形成」をスローガンとし、5教科の学力をバランスよく高める教育方針を教師・生徒・保護者で共有
- **進路意識の醸成** 首都圏を中心とする国公立大学が各大学の特色を伝える国公立大学ガイダンスを設けたり、高校1・2年次にセンター試験を体験受験したりといった、進路意識を高める取り組みを推進
- **生徒の実態把握を強化** ICTサービスを導入し、家庭学習時間調査を効率化。その後、教師間の合意形成を進めながら、模試データを蓄積したり、生徒とのコミュニケーションを深めたりするための機能を段階的に拡充していった

成果と展望

- 2016年度に東京大学に2人が現役合格。17年度には国公立大学合格者が50人を超えた
- 生徒と教師の信頼関係が深まった

PROFILE



旧制・東京府立第五高等女学校として開校。富士山を望む高台に位置する。文武両道の実現に力を入れ、東京都の「理数アカデミー校」や「英語教育推進校」「スポーツ特別強化校」などの指定を受けている。

設立 1920(大正9)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約200人

2017年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、筑波大、埼玉大、千葉大、東京藝術大、東京工業大、一橋大、首都大学東京、横浜市立大などに51人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ497人が合格。

住所 〒164-0013 東京都中野区弥生町5-21-1

電話 03-3382-0601

Web site <http://www.fuji-fuzoku-c.metro.tokyo.jp/>

国公立大学への合格を目標に、 5教科の学力を総合的に向上させる

東京都立富士高校・附属中学校は、100年近い歴史を持つ学校だ。今では毎年のように東京工業大学や一橋大学といった難関国立大学に合格者を送り出しているが、以前は積極的に上位の大学を目指そうとする生徒が少なく、高校低学年次から中堅私立大学への進学を目標とし、力を入れる教科・科目を絞る傾向が見られた。教師側にも、「国公立大学を勧めても生徒には響かない」といった先入観があったと言う。そうした課題に対応するため、2010年度に併設型中高一貫校となったのを機に、指導改善に着手した。「難関国立大学5人、国公立大

*プロフィールは2018年3月時点のものです

学50人」という進学実績の目標を掲げ、その達成に向けたスローガンとして、「富士山型の人間形成」を打ち出した。当時を知る進路学力部主任の松本高明先生は、次のように語る。

「社会のどの分野であつても、問題を解決し、前に進むためには、幅広く、そして高い



東京都立富士高校・附属中学校統括校長
上野勝敏 うえの・かつとし
教職歴37年。同校に赴任して4年目。「生徒の心を耕し、失敗をグッドトライと捉えて挑戦を楽しむ人を育てたい」



東京都立富士高校・附属中学校
松本高明 まつもと・たかあき
教職歴33年。同校に赴任して6年目。進路学力部主任。「保護者との信頼関係を築きながら、生徒のための指導を心がける」



東京都立富士高校・附属中学校
町田清彰 まちだ・きよあき
教職歴24年。同校に赴任して5年目。主幹教諭。高校1学年主任。「生徒の心に入り込み、人間として信頼される教師でありたい」



東京都立富士高校・附属中学校
本間武志 ほんま・たけし
教職歴21年。同校に赴任して4年目。主幹教諭。「学・心とは心に誠実を刻むこと。教えるとともに希望を語る」



東京都立富士高校・附属中学校
池田憲弘 いけだ・のりひろ
教職歴12年。同校に赴任して5年目。進路学力部主任。「教育のおかげで今の自分がある。その恩を次世代の子どもたちに返したい」



東京都立富士高校・附属中学校
今福航 いまふく・わたる
教職歴7年。同校に赴任して2年目。進路学力部主任。「生徒に嘘をつかず、ごまかしをせず

に正直に向き合う」

学力が欠かせません。そこで、高校時代から、裾野の面積も標高も日本一である富士山を目標にしてほしいと考えました。生徒・保護者には、5教科の学力をバランスよく高めていく大切さを伝えた上で、その延長線上に5教科が必要な国公立大学の受験があることを訴えていくことにしました」（松本先生）

中だるみしがちな高校2年次に、進路への意識づけを徹底

各学年団では、成績上位層の生徒を対象とする数学・英語の早朝・放課後講習や、家庭学習習慣の定着を目的とする学習時間調査、模試データの分析、志望校検討会の定例化といった学力向上のための取り組みを充実させていった。特に重視したのは、中だるみの傾向が見られる高校2年次であり、進路意識の醸成を最重要課題として位置づけた。まず、初めて志望校を書くこととなる7月のベネッセの「進研模試」に向けて、国公立大学への意識づけを強化しようとして、6月に国公立大学ガイダンスを実施することにした。首都圏を中心とする8つの国公立大学から教職員を講師として招き、2週間、毎日放課後に1大学ずつ、その大学で学べる内容や国公立大学に進学するメリットなどについて講演してもらった。生徒の目を地方国公立大学にも向けさせるという方針の下、1大学は必ず首都圏以外の大学も招き、生徒には2大学以上を受講するよう指導した。

「夏季休業期間には、国公立大学を中心にオープンキャンパスへ参加するよう呼びかけています。大学で学びたい学問が具体的にイメージできるようにすれば、高校2年次秋の科目選択にも目的意識を持って臨めるようになる」と考えました」（松本先生）

センター試験の体験受験で、大学入試への意識を高める

希望進路にかかわらず、センター試験は全員が受験するという方針も、高校低学年次から生徒・保護者に繰り返し伝えていく。その一環として、高校1・2年次にはセンター試験を体験受験するよう指導している。主幹教諭で高校1学年主任の町田清彰先生は次のように話す。

「体験受験は、本番のセンター試験で8割以上得点するために、今後、どこを強化していけばよいのかを考えるきっかけになります。1年生は解けない問題の方が多いですが、既習の分野・単元からの出題であっても定期考査とはひと味違うことを体感し、3学期以降の学習につなげてほしいと考えています」
そうして国公立大学志望者を増やす一方、志望を固めた生徒に対しては、学習と精神的な支援を徹底している。例えば、高校2年次2月の難関国公立大学ガイダンスでは、卒業生を講師として招き、「3年次0学期」の今から何をしておくべきかをテーマに、具体的な勉強方法を、自身の体験談を交えながら語ってもらう。

また、3年次6月からは、難関国公立大学志望者を対象とした個別面談を随時行う。進路学力部の教師が1人10人前後の生徒を受け持ち、現在どのような学習をしているのか、添削指導はどの教科担当に頼むのか、夏季休業期間はどうのようによろしく予定なのかなどについて尋ね、その情報は学年団と共有している。

生徒の実態把握の効率化に向け、「Classi」の活用を段階的に推進

17年度からは、さらなる指導改善を目指し、「Classi」(*)を活用している。その背景には、進路行事の増加や、きめ細かな指導を徹底したことによる教師の負担の増加がある。例えば、町田先生の学年では、中学1年次から、毎朝SHRにおいて生徒が前日の家庭学習時間を紙のシートに記入していた。3年間継続する中で、その効果を感じる一方、データの集計などを効率化できないかと考えるようになったと言っている。

導入にあたっては、ICTに戸惑う教師が出ないよう配慮した。最初は学習記録機能を中心とするいくつかの機能のみの導入とし、教師が慣れてくるタイミングを見計らいながら、生徒の実態や学年団の課題に応じて、活用する機能を徐々に増やしていった。Classiの管理を担当する進路学力部の池田憲弘先生は、こう述べる。

「ICTサービスは、実際に使用してみないと、そのよさを実感しづらい。最初から全教師の納得を得ようとするのではなく、

まずは部分的に導入してとにかくClassiに触れてもらうことを優先させました。そうして、ICTサービスのよさへの理解を徐々に深めていくとともに、新機能を取り入れる際には、必ず各学年会議で検討して合意形成を図り、段階的に導入を進めていきました」

現在では、探究活動の資料やレポート、進研模試の分析結果などを学年団で共有したり、アンケート機能を用いて行事ごとに生徒が振り返りをしたりと、活用の場が大きく広がっている。また、学校の取り組みや生徒の現状を知りたいという保護者の要望にこたえるべく、週に1回程度、行事に取り組み生徒の様子や教師の思いを、Classiを通して保護者に発信している。

Classiは、生徒と教師のコミュニケーションツールとしても活用されている。例えば、学習記録を入力する際、コメント欄に日々の出来事や思いを書く生徒が増え、それを見た担任が、コメントを返すようになった。そうした学級日誌のような双方向のやり取りにより、生徒と教師の関係性が深まっている(図1)。進路学力部で高校1学年担任の今福航先生は、こう話す。

「教師に直接声をかけにくくても、Classi上であれば自分の思いや考えを率直に伝えられるという生徒も少なくありません。コメント欄に書かれた話題について面談で話し合うこともでき、多くの生徒とより緊密なコミュニケーションが取れるようになりました」

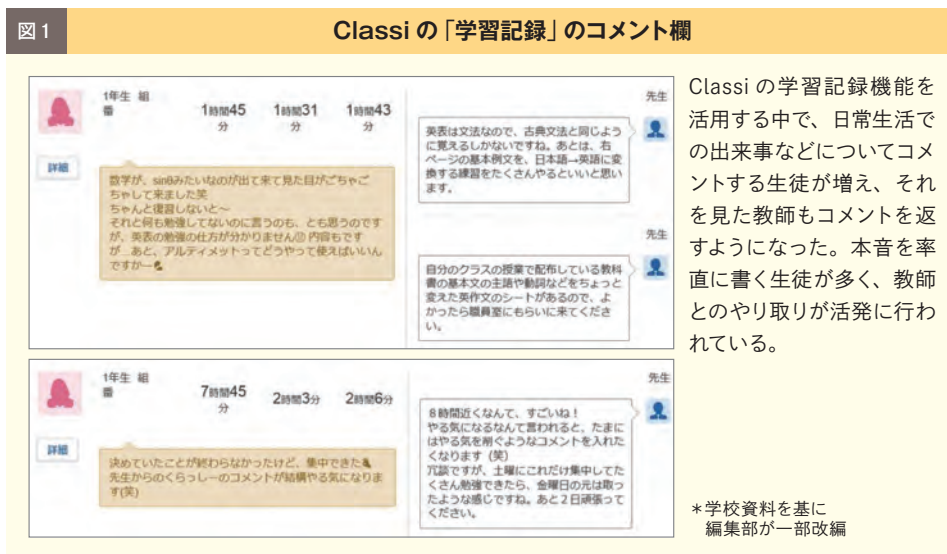
担任以外にも、生徒のコメントに返信したり、

コメントの内容を踏まえた声かけを行ったりする教師が次第に増えていった。すると、「先生が自分を見てくれている」「自分の努力を認めてくれる」という思いが生徒の中に生まれ、それが教師への信頼感を高めている。

「教科学力にとどまらず、これからの社会を生き抜くためには多様な資質・能力が求

Classiの学習記録機能を活用する中で、日常生活での出来事などについてコメントする生徒が増え、それを見た教師もコメントを返すようになった。本音を率直に書く生徒が多く、教師とのやり取りが活発に行われている。

*学校資料を基に編集部が一部改編



* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図 2

Classi の「生徒カルテ」

<p>今回の成果（良かった点）と課題（良くなかった点）について、それぞれつづ以上感じたことを記述してください。</p>	<p>国語 物語文読み進えちゃって振るわなかった。古文は助動詞や単語の意味が弱いし、以外と配点高くて痛い。 英語 文法問題の次問4がダメだった... 数学 基本的な二次関数ができてるつもりで大分忘れてた。二次方程式や場合の数は応用力がついてきた。</p>
<p>前月7月の模試と比較して各教科どうだったか感じたことを記述してください。</p>	<p>国語はもつとできた。物語と古文確実にとりたい。一番わかるのが現代文なのはなんか...。 英語は大分つかんできた。時間足りないからもつと正確に早くやりたい。 数学はほんとにまだまだ。危機感ばかり。過去問ではもうちょつといけてたのに。ど忘れ激しい。反復練習で定着させたい。</p>
<p>次回の2月模試に活かすことを1つ記述してください。</p>	<p>数学は模試の範囲の問題集を、基本だけでもとこなしておいて。次こそ数学で足を引っ張らたくない。国語は古文で確実にとれるように助動詞とかの記憶を確実しておく。英語は長文のスピードを付ける。</p>

進研模試の振り返りとして、生徒が Classi 上に自己採点結果や今後の課題とその対策などを書く。今後は、文化祭や合唱祭といった行事を始め、あらゆる教育活動の履歴をポートフォリオとして蓄積していく予定だ。

*学校資料を基に編集部が一部改編

められます。数値化できないものも含め、教師がきちんと見取ることが重要です。例えば、教科学習でつまづいている生徒に、『君が皆をフォローしてくれたから、合唱祭がうまくいったよ』と声をかければ、生徒は自信を取り戻すことができ、教科学習や大学入試にもまた向き合えるようになります」（池田先生）

現在は、Classi の生徒カルテ機能の活用をより充実させることを検討中だ。これまでは模試などの振り返りでの活用が中心だったが、今後はあらゆる教育活動を記録し、振り返らせるこ

とで、生徒が持っている資質・能力を可視化し、その変容や成長をメタ認知できるようにしていきたいと考えている（図2）。

国公立大学受験を見据えた、個別指導体制の整備を急ぐ

一連の取り組みにより、5教科のバランスの取れた学習が、同校の指導のスタンダードとして定着した。それは、進学実績の向上へと結びつき、指導改善に力を入れ始めた学年である附属中学校第1期生が受験した16年度入試では、2人の生徒が東京大学に現役合格した。「自分も先輩に続こう」という思いの下、高い目標を設定して学習に取り組む生徒が目立つようになり、17年度入試では、中高一貫校になって初めて国公立大学の合格者が50人を超えるとともに、早稲田大学の合格者も過去最高を記録した。上野勝敏校長は次のように述べる。

「国公立大学への意識づけの強化によって、難関私立大学の合格者数が増えるかもしれないと思っていました。実際は増えました。裾野の広い学力を身につけていけば、おのずと私立大学入試にも対応できるようになるのだと実感しています。また、進路の視野も広がり、地方国公立大学への合格者が毎年出るようになりました」

Classi を活用した指導も根つきつつあり、生徒の学習意欲が向上している。導入当初よりも前向きなコメントを書く生徒が多くなり、授業

をしていて生徒の信頼を感じるとい教師が増えている。18年度に高校1学年主任に就任予定の本間武志先生は、次のように分析する。

「常に生徒のために何ができるのかを考え、先生方のニーズを踏まえながら、Classi の機能を拡充してきた結果だと思えます。また、先生方と目線合わせができていないと、指導への活用に差が出てしまい、生徒を混乱させることにもなりかねないため、『富士山型の人間形成』という指導方針を教師間でしっかり共有できている点も効いています。18年度1学年でもこの流れをうまく引き継いでいきたいと考えています」

指導改善が大きく実を結びつつある同校だが、教師たちの意識は次の目標に向かっていく。次期進路学力部主任に就任予定の田村嘉信先生のリーダーシップの下、Classi の全学年への波及、国公立大学受験を見据えた個別指導体制の整備といった課題に、一つひとつ取り組んでいく考えだ。前者については、池田先生を中心に活用のノウハウの継承を図る。後者については、苦手教科・科目に関する個別相談に応じる担当教師を、各学年に配置できるよう計画している。

「教師は生徒の期待に応えようとして指導力を伸ばし、その積み重ねによって学校全体が活性化していきます。指導改善に終わりはありません。今後も、生徒がより高い目標を実現できるよう、先生方と力を合わせていきたいと考えています」（上野校長）